

チャレンジする Someone NEWS

～挑戦者の履歴書

第39回

吉岡しげ美氏 (音楽詩家・作曲家)

——自身が切り開いた「音楽詩」の世界で45年

一般社団法人 洗楓座 代表理事

佐藤建吉

▼茨木のり子を音楽詩

筆者は茨木のり子の詩と音楽の会を、2019年から毎年開催している。その当時、毎月夕方に開催される「日比谷梁山泊」という放談会に参加していた。世間は狭いもので、その会には古地図の電子版を作成している小島豊美氏もたまに参加していた。朗読会の話をする時、同氏がプロデュースした吉岡しげ美のCDをサンプルとして2枚持参して事務所に来てくれた。そのCDのタイトルは、茨木のり子の代表作である『私が一番きれいだったとき』をつけている。早速、聴いてみた。

このCDには、『私が一番きれいだったとき』の音楽として次のように紹介されている。武蔵野音楽大学、日本女子大学、同大学院修士課程修了。音楽大学卒業後、舞台・映画の音楽、テレビ・ラジオの作曲・編曲を担当。

岡氏の場合、個性豊かな表現者であり、氏のほか私たちが同様に自身の世界をつくり出す表現者として活躍している。その手段が氏の場合、詩であり音楽であり、結果として音楽詩の完成であった。

岡氏の子供時代は、一人っ子でピアノなどの習い事で育ったという。ピアノは、彼女の友達であった。小学校6年の時に父親が癌を発症入院、母親は看病で一人ぼっちの時間が多かった。そして中学3年になると父親が亡くなった。その寂しい思いを紛らすために日記を綴るような思いであったという。

1977年、28歳からであるという。「音楽詩」の原型がこうして作られた。ヤクルトホールで初演したという。この音楽詩という表現方法が、その後、今日まで、岡氏に定着した。とりわけ、金子みすゞとの出会いは影響が大きい。1983年、手書きの詩集が「自分」ではあるが、この新聞記事を見た。世間もこれを契機に、みすゞの詩は多くの人の心にひびき、吉岡氏もみすゞの詩に作曲し、歌いながら、音楽教育との係わりも身に着けた。その後、作曲・編曲、放送番組の制作の現場で働いた。みすゞの詩を通して、生命への豊かな、篤く深い想いを伝えたい。

さらには、茨木のり子、新井和江、与謝野晶子など川和江、与謝野晶子などの女性詩人の詩や短歌に曲をつけて、端緒となったのは、岩手県北上市の詩人、小原麗子。さらに、福島県の詩人、新開ゆり

「だれかに あいたく て／なにかに あいたく て／生まれてきたー」

このCDには、茨木のり子の詩だけでなく、金子みすゞの『ユメ』『おとこ』と、謝野晶子の『君死にた

まぶことなかれ』、新井和江の『わたしを束ねなち』(JULA出版局)『想ひあふれて』(毎日新聞社)『金子みすゞをうたう』(クレヨンハウス)『花嫁人形@幸せのゆくえ』(新読書社)他がある。東京生まれ。

以上で、大方の人物像は把握することができている。音楽詩の雰囲気は紙ではわからない。その意味では、自身のHPを見ることができると聞くことができる。

今回のコラムの作成のために吉岡氏と、久しぶりの電話でヒアリングした。昨年12月に茨木のり子の詩と音楽のコンサートでも出演していただいた。話弾んだ。

筆者の興味は、音楽詩という表現方法をどのようにつけて始めたか、その具体的な背景を知りたい。そこで詳細に書くことはできないが、だれもが、いろいろな背景や切っ掛けで、独自に人生を送っている。吉

着けた課題の選定と表現、そしてその選定出会いとする境遇。これらが一体となって出来上がったといえる。換言すれば、吉岡氏の音楽詩は、「自分詩」であるが、素材は他者の表現豊かな優れた詩歌作品が、自分の境遇の周波数と同調したものである。そうしたア

子。吉岡氏は、東北に住む二人の女の詩人から、土と自然と向き合ってきた「女」、農村の困窮の中で生きる「女」の強さを知った。

彼女らの詩に、曲をつけてコンサートを開催。1977年、28歳からであるという。「音楽詩」の原型がこうして作られた。ヤクルトホールで初演したという。この音楽詩という表現方法が、その後、今日まで、岡氏に定着した。とりわけ、金子みすゞとの出会いは影響が大きい。1983年、手書きの詩集が「自分」ではあるが、この新聞記事を見た。世間もこれを契機に、みすゞの詩は多くの人の心にひびき、吉岡氏もみすゞの詩に作曲し、歌いながら、音楽教育との係わりも身に着けた。その後、作曲・編曲、放送番組の制作の現場で働いた。みすゞの詩を通して、生命への豊かな、篤く深い想いを伝えたい。

さらには、茨木のり子、新井和江、与謝野晶子など川和江、与謝野晶子などの女性詩人の詩や短歌に曲をつけて、端緒となったのは、岩手県北上市の詩人、小原麗子。さらに、福島県の詩人、新開ゆり

少し重なるが、音楽詩へさらに動機づけになったのが、女ならではの結婚と出産、そして養育であった。しげ美の旧姓は「難波田」。戦国時代から続く武家の家柄。自己中心といっただけで失礼になるかもしれないが、一人っ子で自身の思いで、逆境においても切り開いてきた「自分」ではあるが、この新聞記事を見た。世間もこれを契機に、みすゞの詩は多くの人の心にひびき、吉岡氏もみすゞの詩に作曲し、歌いながら、音楽教育との係わりも身に着けた。その後、作曲・編曲、放送番組の制作の現場で働いた。みすゞの詩を通して、生命への豊かな、篤く深い想いを伝えたい。

さらには、茨木のり子、新井和江、与謝野晶子など川和江、与謝野晶子などの女性詩人の詩や短歌に曲をつけて、端緒となったのは、岩手県北上市の詩人、小原麗子。さらに、福島県の詩人、新開ゆり

海外での発表

吉岡氏は、大学教員と結婚し、夫の在外研究でアメリカのカリフォルニアに滞在した。それを機に、カリフォルニア大学バークレー校にて、ア

海外公演歴がある

以下のように多数回の海外公演歴がある

◎アメリカ：サンフランシスコ(複数回)、パークレー(複数回)、ニューヨーク、ロサンゼルス(複数回)、サンディエゴ、以下、日本語を学んでいる学生が主なる受講者の講演「ミニコンサート」。サンフランシスコ大学、サンフランシスコ州立大学、カリフォルニア州立大学チコ学校、エルセリートハイスクール

◎フランス：パリ(複数回)

国内でのトピックス

2011年に東日本大震災で被災した岩手県大槌町の子どもたちを支援する「被災した大槌子ども基金」を設立し支援コンサートを行っている

最近の話題では、2021年10月13日&20日にNHKラジオ深夜便に出演して、ラジオ深夜便「わたし終いの極意」に出演して、2週で前編&後編で、女性詩人の詩と共に生きて45年について、今までどこから

への想いが、アナウンサーとの対話で語られた。2022年7月2日に「吉岡しげ美 七夕コンサート」25回記念七夕・星々に詩つが、渋谷で開催された。ゲストに俳優の金田賢一、狂言師の野村万蔵を迎え、

筆者の場合、浜野佐知監督の映画『百合子、ダンスウィーターニヤ』の音楽監督のほか、さらに雑誌『青鞥』の音楽作品化、明治・大正期の女性の労働歌「秩父機織唄」「カニ工の歌」などの発掘と紹介の仕事にも興味がある。50周年に向けた活躍を期待したい。

【註1】吉岡しげ美オフィシャルサイト、http://shieim.net/



コンサートで弾き歌う吉岡しげ美氏

「だれかに あいたく て／なにかに あいたく て／生まれてきたー」

このCDには、茨木のり子の詩だけでなく、金子みすゞの『ユメ』『おとこ』と、謝野晶子の『君死にた

まぶことなかれ』、新井和江の『わたしを束ねなち』(JULA出版局)『想ひあふれて』(毎日新聞社)『金子みすゞをうたう』(クレヨンハウス)『花嫁人形@幸せのゆくえ』(新読書社)他がある。東京生まれ。

以上で、大方の人物像は把握することができている。音楽詩の雰囲気は紙ではわからない。その意味では、自身のHPを見ることができると聞くことができる。

今回のコラムの作成のために吉岡氏と、久しぶりの電話でヒアリングした。昨年12月に茨木のり子の詩と音楽のコンサートでも出演していただいた。話弾んだ。